川村学園女子大学研究紀要　第21巻　第1号　213頁—227頁　2010年

放課後の児童の居場所へのニーズアセスメント
——子どもの発達と教育の視点から——

川　嶋　健太郎*・北　原　靖　子**
蓮　見　元　子***・浅　井　義　弘****

A Needs Assessment of Desirable Ways of Spending Children's after School Hours

Kentaro KAWASHIMA, Yasuko KITAHARA, Motoko HASUMI, Yoshihiro ASAI

要　旨

本研究では放課後子ども教室を運営する事業を評価するためにはどのような指標が適切であるかを調べるために，自治体職員，放課後子ども教室スタッフ，保護者，教員を対象にしてインタビューを行った。この結果，放課後の子どもの過ごし方・居場所のあり方については，面接協力者の子ども時代を理想とした，異学年の交流・自由な遊びといった面が望まれる一方で，現実問題としての安全性・大人の目の必要性・子どものゆとりのなさへの意見が示された。また放課後子ども教室を評価する指標については，参加人数・満足度などは数値化できる利点がある一方で，その妥当性への疑問が示された。

キーワード：放課後，居場所，インタビュー，ニーズアセスメント，放課後子ども教室

*非常勤講師　学習心理学
**教授　発達心理学
***教授　発達臨床心理学
****教授　臨床心理学

1. はじめに

放課後子ども教室とは

平成19年度からスタートした「放課後子どもプラン」に基づいて各地域では放課後の子どもの居場所作りが進められている（文部科学省生涯学習政策局，2008）。放課後子ども教室が始まってから2年が経過しており，その問題点が様々な立場から提起されている。（汐見，2009）。放課後子ども教室事業が，その目的としている「放課後等に子どもが安心して活動できる場所の確保」・「次世代を担う児童の健全育成を支援」することが適切にできているか評価することは必要不可欠と考えられる。

放課後子ども教室をより実りあるものとするためには，これに関係する主体それぞれの意見をとりまとめ，目標および評価基準を定めた上で，定期的に評価を行い，運営を改善していく必要があると考えている。放課後子ども教室には様々な主体が関係している。参加する児童のみならず，その保護者や参加していないまでも潜在的なユーザである児童・保護者たちがいる。また運営をする地方自治体の職員や嘱託職員，ボランティアとして参加する地域住民・学生・NPOがいる。それぞれの参加者はその人たちなりに放課後子ども教室に対して意見を持っており，自分たちの意見を基に放課後子ども教室が改善されることを望んでいるといえよう。無料でよりよいサービスを求める保護者に対して，予算と制度の制約の下で運営を行う行政，仕事の負荷と責任が重い現場のスタッフ，やりがいを求めているボランティア，放課後子ども教室に参加する児童の間で意見が異なるのは当然といえる。その上で数値化できる具体的な評価基準を合意の上で定めること無しには放課後子ども教室を運営する様々な主体の労力を正当に評価することが出来ないだろう。ある一つの主体，例えば行政主導の評価基準において改善が見られたとしても，そのほかの主体にとっては逆に悪化したと感じられるかもしれないからである。

これまでの子どもの居場所について研究では空間・建築的な側面や心理的な機能の側面から研究されてきた。空間・建築的側面では，小学校の教室・廊下・共同スペースがどのような頻度でどのような人数で利用されているかなどを行動観察している（中村・西村・鈴木，1999; 瀧澤・藍澤・菅原，2007）。一方，子どもの遊び場・居場所の心理的な機能については質問紙やフィールドワーク，インタビューにより検討されている（川崎・高橋，2008；大寺・小沢・豊田・宮崎・芳賀，2000；杉本・庄司，2006；豊田・大賀・岡村，2007；山下，2007）。また筆者らも子どもの他に保護者およびボランティアを対象としたアンケート及びインタビュー調査を行っている（川嶋・北原・蓮見・浅井，2009；北原・柴田・蓮見・川嶋・浅井，2009）。

しかし，これらの研究では子どもの放課後の居場所の実態を把握したり，心理的な機能を検討することは出来ても，各地方自治体における放課後子ども教室事業に影響を与えたり，放課後子ども教室の運営改善を示唆することは難しいと言えよう。

各地方自治体では行政改革の一環として事務事業評価行われており，また中央省庁においても政策評価が実施されている（山谷，2002）。放課後子ども教室についても，各地方自治体において事務事業評価表が公開されており，事業目標や予算，評価指標などを確認することが出来る。事務事業評価は地方自治体における事業の業績測定という一面があり，自治体の効率的な運営のために今後さらに重視されていくものと考えられる（Hatry, 1999 上野他訳 2004）。事務事業評価の結果は各自治体の行政評価委員会，議会等への報告がなされ，実施計画・基本計画の策定や進行管理，予算編成，職員研修，人員配置，組織再編に影響を与える。このため事業評価の PDCA（計画・実行・評価・改善）サイクルのいずれかの段階に示唆を与えることが出来れば，放課後子ども教室の運営改善に寄与することが出来ると思われる。

ここで本研究の事例である，我孫子市の放課後子ども教室「あびっ子クラブ」について紹介する。我孫子市では平成 19 年 6 月から市内の小学校 1 校において「あびっ子クラブ」を開設している。学童保育室が「就労支援の場」と位置づけられているのに対して，放課後子ども教室である，あびっ子クラブは「体験・交流の場」と位置づけられている。体験活動として「チャレンジタイム」が実施されており，地域住民が有償ボランティアであるサポーターとして，書道・琴・読み聞かせ・ミニテニスなどさまざまな活動を行っている。利用者数は平成 19 年度 8 月から平成 20 年 5 月まででは，平日平均 30.9 人であった。また同じ時期にチャレンジタイムは月平均 9 回実施されている（我孫子市教育委員会生涯学習部社会教育課，2008）。

またあびっ子クラブでは平成 21 年度からは学童保育室との一体的運営を行っている。この一体的運営とは学童保育事業と放課後の子どもの居場所事業を一体的に運営することで学童保育の大規模化の緩和・運営費の削減といった効率的運営をすることである。具体的には，①あびっ子クラブは登録制にすること，②以前からある学童保育の保護機能・施設はそのままに維持すること，③学童保育指導員とあびっ子クラブスタッフを一元化し，シフトを組んだ人員を配置すること，④あびっ子クラブの使用料年間 500 円とすること，などである（我孫子市放課後対策事業検討委員会，2009）。

我孫子市の放課後子ども教室に関わる「子どもの居場所づくり」事業についての平成 21 年度事務事業評価表によると実施に関わる予算額は 687 万 7 千円であり，これに正職員人件費 739 万 2 千円をあわせると，事業費は 1427 万 9 千円である。その事業目的は「子供たちが安心してのびのびと遊ぶことのできる地域環境を整えることにより，子どもたちが自主性，社会

性，創造性などの様々な能力を自然に伸ばし生きる力を身につける」であり，内容は「放課後、子どもたちが安心・安全に過ごすことのできる環境を整備し、地域の方の協力を得て、異年齢間の交流や様々な体験を通して子どもを育む」ことである。事業目標は新規に放課後子ども教室を市内の小学校に開設することである。また当該年度活動目標は平日における１日当たりの参加人数である（我孫子市，2009）。

我孫子市の事務事業評価表では放課後の子どもの居場所を地域の協力を受けながら，子どもの成長を目指す点で非常によいと思われる。ただし，事業目的と参加人数および教室開設数という評価指標には明確な対応関係はないものと思われる。例えば異年齢間の交流や体験は参加人数では測ることが出来ない。また成果を求めて参加人数のみを増加させようとすれば，限られたスタッフでは対応できず，子どもが安心してのびのび遊べる居場所づくりという意味では本末転倒になってしまうかもしれない。どのような評価指標を採用するかによって放課後子ども教室への評価は大きく異なってしまうため，放課後子ども教室に関わる人たちのニーズを把握し，それを適切に測る指標を策定することは非常に重要である。

そこで本研究では放課後子ども教室に関係する主体のうち，自治体職員・現場スタッフ・保護者・教員を対象に，①放課後に子どもはどのように過ごして欲しいのか，②放課後の子どもの居場所はどうあるべきなのか，③放課後子ども教室を評価する指標には何が適切であるのか，という３点についてインタビューによる調査を行った。

2．方法

調査協力者

我孫子市小学校教員１名，我孫子市職員３名，放課後子ども教室スタッフ３名，保護者３名が面接調査に協力した。表１には各面接協力者の性別・年代とどのように放課後子ども教室と関わっているのかについて示した。

手続き

2009 年６月から８月にかけてインタビューを行った。調査協力者に対し，文書および口頭で調査目的・方法・データの分析方法などを説明した。また調査協力を拒否する自由やプライバシーの保護についても説明を行い，同意を得た。

半構造化面接を行い，主に次の３点を尋ねた。職員・スタッフ・保護者・教員というそれぞれの立場において，

表1　調査協力者のプロフィール

事例	性別	年代	備考
市職員 A	男	50 代	放課後の子どもの居場所事業を担当
市職員 B	男	50 代	〃
市職員 C	女	30 代	〃
スタッフ A	女	50 代	放課後子ども教室コーディネーター
スタッフ B	女	50 代	放課後子ども教室スタッフ
スタッフ C	女	50 代	放課後子ども教室スタッフ
保護者 A	女	40 代	女児が放課後子ども教室に通う。自身もあびっ子サポーター
保護者 B	女	40 代	男児が放課後子ども教室に通う。自身もあびっ子サポーター
保護者 C	女	40 代	男児が学童保育に通う。
教員 A	男	50 代	放課後子ども教室が設置された小学校に勤務

1. 放課後の子どもの過ごし方はどうあるべきと思いますか？
2. 放課後の子どもの居場所はどのようなものであるべきと思いますか？
3. 放課後子ども教室がどれだけ役に立っているか評価するとき，どんなことが重要と思いますか？

このほかに各関係者に共通して，放課後子ども教室の一体的運営・安全性・保護機能・子ども同士および子どもとスタッフ・ボランティアとの交流について尋ねている。また立場毎に追加的質問を行っている。すべての質問についてのインタビューには 40 分から 1 時間程度がかかった。インタビューは IC レコーダーで録音され，逐語録に起こされた。

結果

放課後の子どもの過ごし方はどうあるべきかについて

表 2 には調査協力者毎に，放課後の子どもの過ごし方はどうあるべきかについての語りの中から，特に強調されていた部分を抜粋している。右列には語り内容の大まかな分類を付与している。表中の括弧内は調査者による発言および語りの補足・省略などである。この質問では放課後の子どもの活動面を聞いているが，次の質問での「居場所」と同様の語りも多く見られた。

放課後の子どもの過ごし方のあるべき姿に共通していることは，調査協力者の子ども時代の過ごし方であった。すべての調査協力者が自分の子ども時代の過ごし方について語り，今の子どもたちの現状と比較していた。調査協力者の子ども時代には，様々な年齢の子どもたちが一緒になって近所で遊び，基本的に安全であって，TV ゲームなどもなかったため子どもたち自身が遊びを創造しながら，自由に遊んでいたと語られることが多かった。反対に今の子どもは，

異学年で共に遊ぶことがないことからコミュニケーション能力が不足し，また不審者などのため安全な遊び場所が無くなっていることにすべての調査対象者が危機感を持っていることが判る。このため行政が安全な子どもの居場所を確保し，異学年や地域の人と交流や新しい体験を促すことで人間関係を学んで欲しいというニーズについての語りが見られた。

大人がどの程度，子どもの過ごし方に関与するべきかについては背反する思いがあるようであった。子どもは子ども独自の世界の中で自由に遊んで欲しいと望む意見がある一方で，現代の子どもが人間関係をうまく結べない点，および安全性を確保するために大人が子どもの遊びに関与することの必要性も認める意見があった。

また各調査対象者の立場によって，異なる語りが見られた。市職員は放課後子ども教室のような放課後の居場所を行政が行う必要性を説明していた。スタッフからは居場所の基本が家庭であるという意見が見られた。

放課後の子どもの居場所はどうあるべきかについて

表3には放課後の子どもの居場所はどうあるべきについての語りを調査対象者毎に表している。この質問では「居場所」の特徴について聞いているが，最初の質問での語りと重複する部分が見られた。ほぼすべての調査協力者が居場所が安全であることを最も重要なこととして話していた。またこの安全性を保障するために大人がその居場所にいて見守ることを現状では必要なものとしていた。次に重要視されていたのが安心である。これは子どもが居場所で安心するという面と，親が自分の子どもがその居場所に行っていると思うことで安心するという面の2種類が語られた。また子どもの安心が信頼できる大人が居場所にいることによって達成されるという意見が述べられていた。

放課後の居場所づくりを計画している市職員は他の調査協力者と異なる意見を述べていた。子どもたちの選択肢の一つとして，地域の多様性にマッチした形で，効率的な放課後の居場所を行政が提供するというもので，これは我孫子市における放課後子ども教室の目標として考えていると言えるだろう。

放課後子ども教室を評価する指標について

表4には放課後子ども教室を評価する際の指標についての語りを調査対象者毎に表している。ただし評価指標というと判りにくいため，放課後子ども教室が役立っていると思うのはどんな場合であるかと質問を言い換えている場合もある。

具体的な評価指標として挙げられたのは，放課後子ども教室の利用者数と子どもへのアンケート調査での満足度評定，体験活動へのリピート率であった。しかし，どれも一応は測定出来て数値となるものの，その妥当性や事業目的との対応について市職員・スタッフ共に疑問を

表２　放課後の子どもの過ごし方についての語り

事例		内容	分類
市職員 A	—	子供が自分で自主的にやりたいことが出来る環境であったらいいだろうな。それは外で遊んだり部屋の中で遊んだり，その子の自分でこうしたいということが出来る環境を整備することなんだろうという風に思っています。われわれの立場からするとね。	**自由な遊び・行政による支援**
	—	たぶん自分たちは外でのびのびと空き地で遊んでいた環境があったからそういうことが理想なんだろうって。ですけど，今の子供たちってそういう環境がないからそういうことを望んでいないかもしれない。	**自分の子ども時代**
		（今の子どもも異年齢と遊ぶ必要がある？）	**異学年遊び・人間関係の学び**
	—	それはまさに大人の社会がそのまま子供の社会にあるということなんだろうと思うんですよね。	
市職員 B	—	我孫子市の子どもたちの放課後にやっぱりその・・・行政が何らかの手立てをしていかなければいけないと。	**行政による支援**
	—	時間･空間･仲間。昔の子どもたちは時間･空間･仲間にもゆとりがあったけれども，今の子どもたちはあまりゆとりが無くなってきて。	**自分の子ども時代・ゆとり不足**
	—	（昔は）友だちはその学年を超えても，近所の友だちとも遊んだし，遊ぶ場所もたくさんあったし・・・（省略），今の子どもたちに置き換えたときになんか今の子どもたち，なんか可哀想だなって。人とのコミュニケーションはとりづらくなって，自分の世界に入りがち。	**自分の子ども時代・コミュニケーション不足**
	—	・・・地域のコミュニティーがいろいろあって，おじいちゃんおばあちゃんから子どもまで一緒になって地区の人たちがそこで生活をしているというような，連帯感というか一体感というか。	**地域の子育て**
		（子どもは放課後はいろんな人と関わりながら過ごすべき？）	
	—	そうですね。人間的な豊かさがあるのかなー，人とふれあったり人と関わり合ったり。まあそれが同じぐらいの年であってもそうかもしれないし，世代が違ったりなんかしてもね。	**異学年遊び・人間関係の学び**
市職員 C	—	やっぱりちょっと外で，そういうところで遊んでいると，非常に危ないというのも現実問題としておきているので，その子たちが安全に遊べるためには，今ある・・・あびっ子クラブのような，放課後子ども教室は必要かな・・・児童館がないなかでは，我孫子市にはやはりそういうところがないので，そういう場が，子どもたちが自分たちで安心に遊べる場が必要かなというのは思いますね。	**安全性・安心・行政による支援**
	—	自由にやっぱりほんとは過ごして欲しいですね。大人のほんとは目もなく，子どもたちが自分たちで遊びを作って過ごして欲しい。だから本来だと，今・・・あびっ子クラブは場の提供とは言っていますけれど，やはり大人の目がだいぶあるので，やはり子どもも大人の目を気にして，やはりできないこともある。	**自由な遊び・大人の目**
	—	やはり外遊びだけが好きな子が多いわけではないので，中には本を読んだりとか一人で絵を描いたりとかが好きな子も中にはいるので・・・	**1 人遊び・子どもの多様性**
		（本を読むだとか，絵を描くとかは，家の中でもできるかと思うんですけれども，それでもいろんな人がいる中で遊んで欲しい？）	
	—	う～ん・・・その方・・そうですね，周りの人が・・・やっぱり家の中だと，それこそほんとに誰ともしゃべらない，ず～っとこもりっきりになってしまう。	**孤立**
スタッフ A	—	放課後の子どもの過ごし方の基本は家庭だと思っています。その家庭を核にしてそこから・・・まあ核とか基地とかいう考え方の中から子どもが・・・まだ小学校の段階の放課後ですよね，そこから少しずつ足場を広げて自分の成長に必要なものを獲得して大きくなっていくんじゃないかなと思っています。	**家庭が基地**
	—	学校から開放された時間なので，自由に過ごすことが一番良いと思います。自由っていうか，自分の思い通りの過ごし方ができれば最高だと思います。	**自由な遊び**
		（例えばテレビゲームを思い通りにやるのは？）	
	—	例えば思い通りのものが，それがゲームであったときにはゲームって言うものの善悪というか，功罪？ 良いところと悪いところを，やはり一定の基準で大人が判断してその子にふさわしい遊び方をルールを決めてやった方が良いと思っている・・・	**大人の配慮**

事例		内容	分類
スタッフ A	—	（やって欲しい活動は？）	
	—	無いです。自分が好きなことを見つけられる子は良いけれど，好きなことがそんな小さなうちから見つけられない子の方が多いと思うので，こうやって欲しいと言うことよりも，たくさんのいろいろなことに触れて，成長をしていく過程の中で見つけていく，まだ段階だと思うから，望ましいという考え方は特にはないです。	**自由な遊び・遊び創造・体験**
スタッフ B	—	子どもが子どもの意思で子どもの仲間をきちっと作って過ごせる。	**集団遊び**
	—	人の、友達のいいところを認めて、自分もそういう風になっていきたいとかって思って、そういう輪が広がっていくような感じならいい。	**人間関係の学び**
	—	安心して遊べる場所が、たぶんないんだと思うんですね。児童館とかも我孫子はないですし。公園に行って楽しそうに遊んでるっていう情景っていうのもあまり。	**安全性・安心**
スタッフ C	—	ただいまって帰ってきたときに，お帰りなさいって迎えて学校でのことを報告できたり，レポートできるような場所で，家庭で迎えられるのが一番良い。そこからまた午後の生活が始まって，それぞれの友だちのところ行ったり，公園行ったりとか，学校，あの・・・習い事行ったりだとか。	**家庭が基地**
	—	昔からのコマ回しだったり，あの，学童でもメンコがあったり，おはじきがあったり，将棋とか，昔から，昔の子どもがやってきたようなおもちゃを・・・	**自分の子ども時代**
保護者 A	—	遊ぶことも大事なんですけれど，ときには勉強をすることも大事だと思うので（省略），バランスのとれた生活が送れたらいい。	**バランスのある生活**
		（1 人での遊びは？）	
	—	例えば好きな本を読むとか。あと自分の世界を作るというのも大切なことだと思うんで，小さい頃だと例えばお人形遊びするだとか，男の子だったらミニカーでなんか自分の世界を作るとか，そういうことも発達の中でも大切なこと。	**1 人遊び**
保護者 B	—	一番希望するのは子ども同士で遊ぶこと。異年齢の。出来たら異年齢で，やむをえずならば同年齢でも良いんですけれど，子ども同士で外で遊ぶのが希望。それが一番理想的。	**異学年遊び・外での遊び**
		（異年齢集団を希望するのは？）	
	—	やっぱり縦のつながり，いろんなことを教えてもらったり，下の子には教えてあげて，上の子には下の子に対する接し方，やっぱちょっと優しくしてあげなきゃいけないとか。	**人間関係の学び・異学年遊び**
保護者 C	—	本来であれば，私たちの子どものときはそうだったんですけれど，のびのびと自分の思い通りに，自分の本当にやりたいことをやって欲しい。	**自由な遊び・自分の子ども時代**
	—	今の子は割となんかこう，何と言うんだろう，学校の中でも子どもに聞くと，すごくスケジュールがきつくって休み時間も遊んでいない。	**ゆとり不足**
	—	やっぱり，子どもだけの世界で子どもが自分たちでちゃんと人間関係を築いていったり，その中で遊びだとか，ある意味学習だとかをしていって，育って欲しい。	**子どもの世界・人間関係の学び**
	—	昔は子どもたちが自分たちでそうやって遊んだり，自分でそういう環境を作れたけれども，今はそれは作れていないような気がするんですよ。（省略）だからなんか，敢えて大人が手を出して，そういう環境を作ってあげないと。	**遊びの創造・大人の配慮・自分の子ども時代**
教員 A	—	子どもが学校生活から離れて，地域の，まあ近所の学年を異にする子供たち，あるいは同じ学年の子供たち，地域の中で安全に遊べる，それが自然の姿だと思っている。	**地域の子育て・異学年遊び・安全性**
		（地域の中というのは大人も含まれている？）	
	—	もし可能であれば，大人も加わるというのは望ましいと思っています。でも，子どもの世界は子どもだけの世界であってもいいと思っています。	**大人の目・子どもの世界**

持っていた。

その他，どのような点で放課後子ども教室が評価できるかについては立場によって異なる意見が見られた。市職員では子どもの成長やコアなユーザーによる利用，親の満足などが挙げられていた。スタッフは全員，放課後子ども教室が子育て支援としての役割を果たしていることを重視していた。保護者はそれぞれ異なる点（子どもの満足度・異学年遊び・体験活動など）について言及していた。

3. 考察

本研究では放課後の子どもの過ごし方および居場所はどうあるべきか，また放課後子ども教室を評価する指標について，自治体職員・スタッフ・保護者・教員へのインタビューを行い，放課後子ども教室へのニーズアセスメントを行った。放課後の子どもの過ごし方については，調査協力者は自身の子ども時代を思い起こしながら，異学年の子どもと遊びながら人間関係を学び，新しい体験をしながら自由に遊んで欲しいと答えるひとがほとんどであった。放課後の居場所については，安全であること，子どもや親が安心できること，これらを実現するために信頼できる大人が居場所にいることなどが語られた。

インタビューで語られた放課後の子どもの過ごし方・居場所のあり方の理想は，我孫子市の「子どもの居場所づくり」事業の事業目的・内容とほぼ一致していた。事務事業評価表での目的が地域の子どもの居場所の実態や保護者との様々な話し合い，居場所括りの実践の中から生まれたこと，今回のインタビューの調査協力者は市職員・スタッフであり，保護者の協力者も放課後子ども教室・学童保育に関わりのある人たちでったことから，調査協力者の方々の放課後の理想像と事務事業評価表の目的が大筋で一致することがあっても不思議ではない。ただし地域によってまた保護者によって子どもの放課後へのニーズは様々であると考えられる。このため現在，他の保護者へのグループインタビューおよびアンケートをによりより広い範囲で放課後の居場所のニーズアセスメントを行っている。

放課後子ども教室を評価するための指標についての語りでは，適切な指標が現状では無いことが示された[1]。利用者数は事務事業評価表に掲載されている活動指標であるが，市職員・現場のスタッフ共に単純に利用人数を集計しても実態を反映しないので難しいという主旨の発言をしていた。利用者数が実態を反映していないのは，行事などのために一時的に利用者数が増加したり，事業の目的によく合致した体験活動への参加人数が少ないことなどによる。また利用人数が多すぎると，限られたスペース・人員では安心できる居場所を維持できないという面

表３　放課後の子どもの居場所についての語り

事例		内容	分類
市職員 A	—	もっとお金だとかがあればほんとに児童館が各地域地域にあって，（省略）きちっと専門のスタッフが配置されていたり，（省略）地域の人たちがそこに関わってくる。その方たちはお年寄りであったり，もっと小さな子であったり・・・	**地域の子育て・行政の支援・大人の目**
	—	安心安全という親の心配からすると児童館がない中で，社会的な資源で１番利用しやすい，あとお金もかけずにやれる事業はないか・・・	**安全性・費用対効果**
		大人が用意しなきゃいけない部分があるのかも知れないですよね。それも地方の行政サイドで提供できる精一杯のことをしなきゃいけない。	**行政の支援**
	—	・・・子どもの遊びでありながら，大人の視点で場を提供したり遊びを提供したりするから大人の考えが入ってきてますよね。	**大人の視点**
市職員 B	—	・・・（子供の）自分の生活の中での一つの選択肢として，居場所が多くあった方が良いと思うので，その一つの選択肢としてはいろんな人と交流できるような場，それから自分がやりたいことがそこでできるような場，安心して過ごせる場。	**選択肢の一つ･自由な遊び･安全性･人間関係の学び**
	—	週に二日か三日あびっ子クラブに行けるときには行きたいなと思えるような場所であって欲しいという気がしますよね。それが例えば友だちと遊ぶということでも良いし，お習字やりたいからということでも良いし，うーん。どうしてもその子どもたちの放課後っていろいろやらなければいけないこと，束縛されてしまっている部分がいっぱいあって。	**選択肢の一つ・自由な遊び・ゆとり不足**
市職員 C	—	学童に来ている子はやっぱりお家に自分しかいない，（省略），お家でずっと待っている，お家の前でずっと遊んでいるっていうよりは，やはりちょっと大人の目があったほうが，ある意味安心して遊べるのかな。	**1 人遊び・孤立・大人の目・安心**
		（大人が居場所にいた方がよい？）	
	—	お家に，ご家庭に保護者の方がいらっしゃるのであれば，何かがあっても保護者同士で連絡を取り合ったりとかできると思うんですよね。（省略）学童に預けているお子さんたち，（省略）は，お家に帰っても誰もいなく，要は自分の意志だけで，自分でどこかに遊びに行って，帰ってくるっていうパターンが多いと思うので，そうすると何かがあったときに誰も分かっていない。	**孤立・安全性・安心**
	—	居場所がこうであるべき？・・・こうであるべきという形は，逆にあんまり作りたくない。	**地域の多様性**
	—	この我孫子の中だけでも地域の特性が違うので，なんか本当に地域にあった形で提供できればいいんじゃないかな。	**地域の多様性**
スタッフ A	—	基本は家庭だと思っているわけだから。家庭を核にその周辺で自由にいろいろな年齢層の子と遊べる環境が一番良い・・・	**家庭が基地・異学年遊び**
	—	うんと昔は子どもはもう労働力で，働いていたわけだし，子どもの時代から家のこと何なり。そして今はこの時代。だからもしもそういう理想のときが少しでもあったとしたら昭和 30 年代後半ぐらいはあったんじゃないかな。	**自分の子ども時代**
	—	（家庭が核と言っても，家で遊ぶのではない？）	
	—	ではなく。だから逃げ帰ってもこれる。逃げ帰ったときにそれは受け止めてもらえる。まあそういう過ごし方が小さいときから大きくなる間にだんだんその距離が大きくなっていくのが良いのかなと私は思っている。	**家庭が基地**
スタッフ B	—	学童の場合はやはり働いている親御さんからお預かりしているというあれなので，親に代わってしっかり健康管理から安全面から把握してみていかなくちゃいけないっていうのがあるので，子どもたちは多少窮屈かもしれないけど，その中でももちろんのびのび過ごして欲しいともちろん思っている。	**安全性・自由な遊び**
	—	必ずしもご家庭に遊ぶ時間，親がいるとは限らないかもしれない。やっぱり働いている方のお子さんかもしれない。そうなってくるとそういう子達は安心できる大人がいるところで遊べれば安心する。	**大人の目・安心**
		（大人がいた方が安心する子はどんな子？）	
	—	何かあったときに助けてくれるとか，遊び以外も自分で発展性のない場合はやはり遊ぼうって言ってくるんですよね。一緒に遊ぼうって。	**大人の目・安心**
		（大人がいなくてもよい子はどんな子？）	
	—	自分たちでなんかあったときに解決しようっていう，そういう気持ちは学年によって出てくるんですよね。	**自立**

事例		内容	分類
スタッフ C	—	やっぱり一番は，やっぱり子どもが本当に心から安らげる場所，って漠然としていますけれど。やっぱり学校，学校もある程度集団生活をやってきて，（省略）ある程度緊張の中でお友達関係・・・	**安心・人間関係の学び**
		（具体的にはどんなことが必要？）	
	—	環境面でももちろん清潔で・・・。安全で。	**安全性**
	—	一人は寂しいですよね。あんまり多いのもどうかなという・・・	**孤立**
		（大人は必要？）	
	—	やっぱり放課後子どもだけって言うのは，心配なんじゃないですか。今，すごく危ないじゃないですか，いろいろ。前よりもこう・・・。	**安全性・安心**
保護者 A	—	子どもの世界は大人の目が無くても，大人の目がない方が・・・子どもが遊ぶ世界って言うのは自由でいいような気がするんですけれど，まあ，こんな世の中なので安全を考えると大人の目があった方がと思うんですけれども。	**子どもの世界・大人の目・安全性**
	—	学校から帰って大人がいないお家で，外遊びにそのまま行ってしまう場合は，ちょっとなんか心配が多いような気がするんですよね。	**外遊び・安心**
		（保護者が自宅にいない場合には大人の目が子どもにとっても必要？）	
	—	どっちかっというと，そうですね。あの，心理的な安定があれば，なんか子どもにもそれなりに自信があって，そんなに悪いことをしないような気がするんですけれど，なんか学校から家に帰って報告も何もなしに，こう，自由なところにいるとなんかどうなんでしょうか，心の安定の無いままに・・・そんな気がしてしまう。	**家庭が基地・安心**
	—	ある程度，子どもの自由が許される場じゃないと，えー，ダメじゃないかなと思います。	**自由な遊び**
保護者 B	—	やっぱり基本的に一番は安全ですね。安全な場所で。で，外でみんなで遊べるという意味においては公園と言いたいけど，最近あんまり安全なとこでなくなってきている。	**外遊び・安全性**
	—	本当は，一番の理想は大人も見ていない方がいいと思うんですよ。いちいち口出して，あの手を出して口を出す大人は子ども同士で遊ぶときいない方がいいと思うのね，できるだけ。でも今の子どもたちって，昔ほど集団のルールも出来ていなかったりするので，やっぱり喧嘩しても限度を知らないとか，そういう面では今の子どもには，大人が見ていた方がいいんですかね。そうですね。本当に危ないときにだけ手を出す大人が見てくれていれば理想なのかな。	**子どもの世界・大人の目・安全性**
保護者 C	—	やっぱり子どもがやっぱり，気持ちを落ち着けて，安心していられる場所であるとか，あまりこうマイナスの感情を持たなくて良い場所？（省略）すごく活発にその時間を過ごしたいという子であればそうして欲しいと思うし，静かに休息をしたいであるとか・・・	**安心・自由な遊び・子どもの多様性**
		（どうしたら子どもが安心する？）	
	—	子どもが・・・例えば大人とか子どもとかにかかわらず，自分が信頼をしている人がいるとか，やっぱり人間関係が主だと思います。	**人間関係・安心**
教員 A	—	理想的には家の近くにあるということがまず一つ。いつ行っても受け入れてもらえるということがもう一つ。それから安全であるべき。	**家庭が基地・安心・安全性**
	—	私の小さい頃はね。大体集落・村 30 くらいのね，小さな村だったけれど，集まる，あそこの家に集まるっていうそういう特定の家っていうのが何軒かあったんですよね。	**自分の子ども時代**
	—	（大人は居場所で見守っていた？）	
	—	近所の庭のある家にみんなで集まれとなれば，家の敷地の中で遊んでいるわけだから。後はもう外に出れば遊んでいる。それはもう大人の目はなかったかもしれないが，逆に子どもに危害を加えるようなそういう大人もいない時代だったですよね。	**外遊び・安全性・大人の目**

表4　放課後子ども教室を評価する点および指標についての語り

事例		内容	分類
市職員 A	—	子どもたちが利用して楽しいところ，また行きたいところ，居心地がいいっていう感想が返ってくるような場（省略）。たぶんそういってくれる人はいっぱい利用する人の中でも少ないかもしれないけども，そういう核になるような，ここが絶対必要で自分たちにとって，なくなっちゃ困るというような場。	**子どもの満足度・コアユーザ**
		（利用人数ではない？）	
	—	人数ではないと思う。	**利用者数**
		（満足度については？）	
	—	満足度ってのは，子どもが喜んで帰ってきてそこを利用してよかったっていうことで満足をするのか，まさに違う意味合いで，親として都合がよかったのか，そういうのもあるかもしれないですよね。	**子どもの満足度・保護者の満足度**
市職員 B	—	すぐに結果として数値として表すというのは難しいような気がするんですよね。一つは子どもの満足度で，（省略）それって学年によっても違うだろうし，男女によっても違うだろうし・・・。難しいですよね。	**子どもの満足度**
	—	何年か先に大人になってから振り返ったときに，あー，あびっ子クラブでこんな経験・体験ができてよかったなって，自分が振り返って思ったときに効果が出てくる。	**成長が効果**
		（これまでのアンケート結果で満足度以外に注目したものは）	
	—	利用者数は意識しましたよね。学年毎の利用者数とか，男女・チャレンジタイムの回数，出席状況，あとなぜ学童保育の子どもたちがあびっ子クラブに行かないんだろうとかね。	**利用者数**
		（費用対効果や効率性という点では？）	
	—	今回，一体的な（運営）の検討をしたのは効率性ということがやっぱり主な目的ですからね，効率化というところが。ただその，効率化というとこだけで良いのかなっていうのは今年検討していかなきゃいけない・・・	**一体的運営・効率性**
市職員 C	—	（チャレンジタイムの読み聞かせに参加する人数は少ないが）ただ，その人数は来なくても，リピーターの子もいるわけですし，色んなそのお話を聴くことによって図書館に行って本を探したり，本を読むのが好きになったり，という効果も実際にはあるので，だから，なかなかその人数だけでは難しいかな。	**利用者数・成長が効果**
		（チャレンジタイムのリピート率は評価できる？）	
	—	それもねーこの前ちょっとお話にちょうど出てて，サポーター会議の中で。なかなかそうではないのかなーというのはありましたね。	**リピート率**
		（保護者はどんなことを評価している？）	
	—	保護者はまぁ一緒ではないですけれど，まぁご家庭の事情でやっぱり習い事ができないご家庭とかもあるじゃないですか。なので，そういう子がそういう少しでもそういう（体験活動の）場があれば，行ってできる。	**体験活動・親の満足度・保護者の事情**
	—	スタッフが一緒に遊んでくれる。で，何かをやろうと言うと，何かを一緒にやってくれる。（省略）実際に保護者の方何人かお話したんですけれど，あの人がいるから行きたいっていうふうに子どもが言うっていうふうにお話を聞いてますんで，そういう意味では評価できるのかな。	**親の満足度・スタッフとの交流**
	—	働いていて，本当は学童に預けた方が子どもが安全なんだけれど，ご家庭の事情でやっぱり預けられない。そこにあびっ子クラブのようなものがあると，預けられないまでも，少し安心していられるかなっ，というところでは。	**安心・保護者の事情**
スタッフ A	—	客観的に見れば数というのは非常に正しくそれが要求されているものかどうかを表す値ではあるとおもうんですよ。かといって，じゃ自分が携わったときにはその数の中身がまったくこちらの努力と関係なく変動するんですよ。だからやはり，数ではない，でも端から見れば一番単純な物差しであることには間違いないという，その二つが自分の中ですっきりしない。	**利用者数**
	—	満足度って調査されていましたけれど，子どもの満足度って言うのもすごくムラがあるからどこまでが子どもが正直に，本当に満足度を表して答えることができるかどうかも非常に難しいんじゃないかなと思ってはいます。	**満足度**
	—	例えば親がどうしても子どもを家に置いておけない状況って言うのは一般家庭でもたくさんあるんですよ。（省略）そういうときに一時預かり所的に利用しているケースは結構あるんですよね。私はすごく子育て支援をしているという気持ちになって，すごく利用して欲しいと。	**保護者の事情・子育て支援**

事例		内容	分類
スタッフ B	—	子どもが楽しめればもちろんいいですし。親もその時間安心して自分の時間を作ったりとか，出来るわけだから，時間を有効に使えるっていうのはとってもいいことですよね。	**子育て支援**
	—	（利用者）数が多ければそれだけ需要があって役に立っているってことになるんでしょうけど，数に左右される必要はないんではないかなとは思います。	**利用者数**
	—	親にとって子どもがここで安全に過ごせてる，その時間をどう過ごすかってのもそれぞれなのでなんともいえないですけど，親にとっても有意義な時間になるといいなって思うくらいですけど。	**安心・子育て支援**
スタッフ C	—	やっぱりお家にいないお母さんとか保護者が仕事などでいない家にとっては子どもの居場所になっていると思いますよね。	**子育て支援**
	—	学年を超えた遊び。チャレンジタイムというのがここにはあるので，例えばお習字を楽しみにしていたり，そこで教えてもらう内容を楽しみにしている声も聞きます。	**異学年遊び・体験活動**
	—	居場所・・・そうですよね。これだけ大人の目があるので，あの，安全面でも安心だし，それなりに，さっきも言いましたけれど，お習字でも折り紙でもけっこうあのいろいろ専門の方が教わってくれるのは充実しているじゃないかなと思いますね。	**大人の目・安全・体験活動**
保護者 A	—	その日の終わりに子どもたちがあびっ子から帰るときにどれだけ充実した気持ちで帰れるかなんですが，ただそれも答えようが難しいですね。	**子どもの満足度**
		（子どもが楽しいことが重要？）	
	—	そうですね。で，お家に帰って，お家の人に，今日楽しかったんだよって，にこにこ顔で報告が出来ればそれが一番いいなと思うんですけれど。 親もそれが一番うれしいですよね，あの，学校から帰ってきて第一声なんていうのかなっていつも一番・・・しょんぼりして帰ってくるのが悲しいので，こういうことがあってね，って喜んで帰ってくると一番。	**子どもの満足度・親の満足度**
保護者 B	—	やっぱりいろんな子と遊べることですね。いろんな学年のいろんなお子さんと遊べるというのが一番役立っていると思っています。	**異学年遊び**
	—	学校で普通に生活している中では絶対にそんな，お互い名前を教え合ったりすることは絶対無いような関係の子でも，あびっ子の中でそうやって知り合いになれて，ちょこちょこ声をかけてもらったりするのはすごく本人にとってもいいんじゃないかなって思いますよね。	**異学年遊び・人間関係**
保護者 C	—	例えばチャレンジタイムとかで（省略），なんかカレンダーを作ったり，いろいろあの工作系の何かいろんなものがあるんですね。（省略）その日は帰ってきてから，なんか2時から5時までやったんだって言って，なんかすごく熱中しちゃったって，自分から話をしていたので，やっぱりそれはすごく楽しかったり，ということだと思ったんですね。	**体験活動**
	—	放課後は学童なので正直言ってしまうと，あびっ子が無くても学童があれば勤めている保護者ってそれでいいんですよ。最悪どっちが残れって言ったら，断然学童が残らないと困るという保護者の方がたぶん多くて，私もその1人なんですよ。	**学童保育の優位性**
		（学童ではどんなことを評価している？）	
	—	先生が多少替わりはしていますけれど，どういう性格であるとか，普段どういうことをしているかということを割と把握をしていただいているんですね。性格的なことだとか，行動パターンだとか。だからある意味，よく子どものことを判っていただいている・・・	**子どもへの細かなケア**
教員 A	—	やっぱり必要なときにいつでも利用できることからすれば，長い目で利用している人の数をきちんと把握していって一年間の傾向をつかんで，そういう中での子どもの参加の数を判断していく。	**利用者数**
	—	（学童保育から）親の都合であびっ子に鞍替えした子もいます。それは何人も聞いていますから。だけどもあびっ子はあびっ子の中で制限が，時間的な制限があるので，その中で収まるという判断で親はそうするんでしょうけれど，本来的に親があびっ子に行きなさいよと，そういう話はないと思いますよね。	**保護者の事情**

もある。しかし，利用者数は客観的に測定出来るほとんど唯一の結果指標であるため，利用者数をベースとしてより実態と目的に則した指標を考案する必要があると思われる。またアンケートによる子どもの満足度についても，本当に子どもの満足をはかれているのかという疑念があることが判った。住民の満足度を評価指標とすることは，事業に対する住民とのコミュニケーション・合意形成のためには重要と考えられる（中島，2004）。今後は子どもの居場所や活動に対する満足を適切に数値化する質問項目を作成し，多くの関係者が納得できる説明が必要なものと思われる。

放課後子ども教室の評価指標を作成する際には，複数ある事業目的それぞれに対応するような指標を作成し，各関係者から合意を得ることが重要と思われる。我孫子市の「子どもの居場所づくり」事業の目的は１つではなく，子どもが安心する・のびのび遊ぶ・子どもの能力を伸ばして生きる力を身につけるなどがあり，より具体的には地域住民との協働・異年齢間の交流・様々な体験の実施などが挙げられていた。これら複数の目的がどれだけ達成したかを測定するには利用者数などの単一の指標では測定出来ないのは当然である。そこで子ども・保護者の意見をうまく取り入れながら，事業の活動と目的の対応関係を整理することが必要であろう。その上で事業目的と対応した複数の指標（例えば，利用者数（行事以外での利用者数，体験活動への参加人数）・ボランティア参加数・子どもや保護者の満足度・各種アンケートなど）を選定し，放課後子ども教室の成果を複眼的視点で測定することで，改善活動につなげていく努力が必要だと考えられる。

謝辞

本研究は財団法人こども未来財団　平成21年度児童関連サービス調査研究「放課後子どもプランの実際の運営について自治体レベルでの評価指標作成等に関する研究―子ども・保護者・教職員・ボランティアへのアンケート調査に基づいて―」より補助を受けて行われた。

注

1　放課後子ども教室設置数は明確な事業目標であり，適切な事業の進捗状況の指標と言えるが運営中の放課後子ども教室がどの程度住民の便益となっているかを測定する指標とはならないだろう。

引用文献

我孫子市，2009，平成 21 年度事務事業評価表 .

我孫子市教育委員会生涯学習部社会教育課，2008，子どもの居場所事業 ー小あびっ子クラブ 1 年間の活動報告.

我孫子市放課後対策事業検討委員会，2009，我孫子市放課後対策事業検討委員会報告書 〜学童保育事業と子どもの居場所事業の一体的な運営に向けて〜.

Harry, H.P., 1999, Performance measurement: getting results. Urban Institute.
（ハートリー，H.P. 上野宏・上野真城子（訳），2004，政策評価入門　東洋経済新聞社）

川嶋健太郎，北原靖子，蓮見元子，浅井義弘，2009,「放課後子ども教室について児童の声を聴く―タッチパネル式パソコンを使って―」,『川村学園女子大学文学部研究紀要』，20, pp.141–157.

川崎夫佐子，高橋 知音，2008,「教室不適応の生徒に対応する居場所の機能」,『信州大学教育学部紀要』，120, pp.81–88.

北原靖子，柴田恵江，蓮見元子，川嶋健太郎，浅井義弘，2009,「放課後子ども教室に関わる大人たち―我孫子市立第一小学校の学童保育保護者・教室サポーターを対象とした調査報告―」,『川村学園女子大学文学部紀要』，20, pp.113–125.

文部科学省生涯学習政策局，2008，放課後子どもプラン推進事業実施要綱.

中村拓郎，西村伸也，鈴木一也，1999,「居場所選択に見る生徒の行動特性について―打瀬中学校（教科教室型）・聖籠中学校（特別教室型）のケーススタディ　その 1 ―」,『日本建築学会大会学術講演概要集』，pp.255–256.

中島とみ子，2004,「政策評価指標体系におけるコミュニケーション性―住民満足値の導入に向けて―」,『日本評価研究』，4, pp.97–111.

大寺せい子，小沢暁，豊田英昭，宮崎世津代，芳賀明子，2000,「小学校高学年児童の「学校における居場所」の研究 I：学校で居心地の良い場所」,『日本教育心理学会第 42 回総会発表論文集』，459.

汐見稔幸，2009,「子どものアフタースクールの現状―安全，学び，遊び，体験の場としての子どもの放課後が抱える課題―」,『児童心理 2 月号臨時増刊』，63, 3, pp.2–12.

杉本希映，庄司一子，2006,「「居場所」の心理的機能の構造とその発達的変化」,『教育心理学研究』，54, pp.289–299.

瀧澤直子，藍澤宏，菅原麻衣子，2007,「児童の放課後の居場所形成のための小学校施設活用方法に関する研究」,『日本建築学会大会学術講演概要集』，pp.197–198.

豊田弘司，大賀香織，岡村季光，2007,「居場所（「安心できる人」）と情動知能が孤独感に及ぼす効果」,『奈良教育大学紀要』，56, pp.41–45.

山下智也，2007,「子どもと地域を繋ぐ子ども参画のあり方―日常的な子どもの遊び場「きんしゃいきゃんぱす」の事例から―」,『日本生活体験学習学会誌』，7, pp.1–15.

山谷清志，2002,「我が国の政策評価― 1996 年から 2002 年までのレビュー―」,『日本評価研究』，2, pp.3–15.